

現代の教養は発言力も重要 伝える中身と手段を育成

中嶋嶺雄氏 (国際教養大学学長)

「教養という言葉の起源はかなり古く、中国の歴史書、『後漢書』にも登場します」。教養教育がどのように形成されてきたかを問う質問に対し、中嶋嶺雄氏はこう語り始めた。

西洋からリベラルアーツという概念が入る前にも、日本には教養教育の流れが存在した。その流れは、儒学や老荘思想などに代表される漢学と、江戸期に始まった、古事記、日本書紀、万葉集など日本古代の文献を研究し、日本民族固有の精神を追究しようとする国学の、2つの体系を中心に構成されていたという。「明治以前の教養教育は、寺子屋に代表される私塾で展開されてきました。明治維新後、文部省が設置され国が学校教育を整備しようとした際には、教養教育の中心となる柱を漢学、国学どちらにするか論争や対立が起こったほどです」と中嶋氏。

江戸期には西洋の学問、洋学の一部として、リベラルアーツも日本に入ってきた。「天文学、医学などのサイエンスに加え、外国語も大きな要素でした。幕府の天文方や蕃書調所がこれら洋学に取り組んでいました」。明治期

以降、文明開化、富国強兵の掛け声の下、西洋の近代的な学問や外国語を学ぶことは、より重視されるようになっていった。

「だからといって国学や漢学が教養教育の要素から抜け落ちたわけではありません。以前からあった漢学、国学の要素に洋学や語学が加わり、現在の教養教育は形づくられてきたといえます」

さらに特に戦後は、米国のリベラルアーツ教育の影響も色濃く受けたという。「現在リベラルアーツ教育と呼ばれているものは、米国のそれを指していると考えていいでしょう」。こう見ていくと、日本の教養教育では外国語を学ぶことが常に重視されてきたことがわかる。後で見える国際教養大学の「コミュニケーションスキルとしての英語重視」は、そうした伝統の中に位置づけることもできるだろう。

大学の教養教育は 危機的状況にある

このように形成されてきた現代日本の教養教育だが、特に大学の教養教育は現在、危機的な状況を迎えていると中嶋氏は指摘する。「残念なことに多くの大学で、教養教育がカリキュラムから消え去ってしまっている」。こうした状況に陥ったことには、専門課程重視の観点から90年代に推し進められた、大学院重点化が、強く影響してい

るといふ。その頃大学の教養部が次々と姿を消したことは、読者の記憶にも新しいだろう。

学生に課される 3つのハードル

こうした大学における教養教育の危機的状況に一石を投じようと、2004年に開学したのが、中嶋氏が学長を務める国際教養大学だ。

学生数500人余りの同大学では、現代的な教養のあり方として「国際教養」を打ち出している。「国際教養を身につけるため、私たちは学生に、3つのハードルを越えることを課しています。第1にコミュニケーション手段としての英語の、高いレベルでの習得、第2に人文、社会、自然科学にまたがる、幅広く深い教養を身につけること、第3に海外留学の必須化です」

英語の高いレベルでの習得については、新入生はまず英語集中プログラムで1年間、英語の特訓を受ける。米国の英語検定試験であるTOEFLを受検し、その成績順で1クラス15人前後のクラスを編成する。2カ月ごとにTOEFL受検を繰り返して、編成替えをしていく。後で述べる海外留学までにTOEFLで550点を取れることを目指す。

また同大学の講義はすべて英語で実施されている。英語で考え、意見を述べ、論文も書く。英語を学ぶ大学では



国際教養大学の講義風景。留学生の姿も目立つ。



なかじま・みねお
国際教養大学理事長・学長
1936年長野県生まれ。1966年東京大学大学院社会学研究科修了。社会学博士。専門は国際関係論、現代中国学、アジア地域研究。東京外国語大学教授、学長などを経て2004年から現職。著書は「中国・台湾・香港」「21世紀の大学」など。

なく、英語で学ぶ大学といえる。「グローバル化が進む中、内面で教養を高めるだけでなく、それを海外の人に対しても発信することが求められる。コミュニケーション能力としての英語重視なのです」

だが、いくらコミュニケーション能力を高めても、発信できる中身、教養がなければ意味がないだろう。そこで登場するのが、第2のハードル、人文、社会、自然科学にまたがる、幅広く深い教養だ。たとえば芸術分野では、一流のバイオリニストである渡辺玲子特任准教授によるバイオリン演奏つきの講義など「第一級の芸術に触れること」が展開される。「ビバルディの四季について、なぜ春の曲で春雷が入るのか、それは楽譜でどう表現されるのか、さらにはその部分の演奏を実際聞いてみるといったように講義は進んでいきます」。このほか「心理学」「統計学」「中国映画」「東北文化入門」「東洋思想文化」「文明論」など、多彩な教養科目が用意され、それらを通じて人文学的視点、社会科学の視点、経験的方法、量的論証、批評的思考方法を身につけていく。

また日本文化への理解を深めることも留意されている。学長が学生の必読

書に指定しているのが、英語で書かれた新渡戸稲造の「武士道」。さらに留学中の推薦図書として斎藤茂吉の「万葉秀歌」、中江兆民の「三酔人経綸問答」、ルース・ベネディクトの「菊と刀」なども指定されている。

最後のハードルが海外留学だ。卒業に必要な124単位のうち、30単位前後を、協定を結んでいる海外の一流大学で取得する必要がある。協定大学はカリフォルニア大バークレー校、南京大学、オスロ大学、オーストリア国立大学など世界各地の約60校に及ぶ。国際教養大学の学生が留学に出ると同時に、協定先の大学からの留学生も迎え入れられている。そのため学生の間では海外からの留学生といった講義も見受けられる。そうした環境が、留学に出る前であっても異文化に触れる機会を増やすことにつながっているのだろう。

専門教育課程も国際教養の一環

こうした3つのハードルを乗り越えた上で、学生たちは専門課程へ進む。地域研究が中心のグローバル・スタディーズ課程と、国際ビジネスを学ぶグ

ローバル・ビジネス課程が用意されている。国際基督教大学と同様に、「遅い専門分野の決定」が同大学でも採用されている。「ここでいう専門教育は、一般教養に対する専門教育ではなく、あくまでも国際教養の一環と位置づけています」と中嶋氏は説明する。

現代の教養には、発信力も求められる。そのことを裏付けるエピソードとして、中嶋氏はこんな話を披露した。「ある雑誌の国際版編集長が、なぜ日本が国連安保理の常任理事国になれないのかを語っていた。彼は外交官に問題があると指摘していました。日本の外交官は黙っていることが多い。また外交官であるにもかかわらず、しばしば、しゃべらないのではなく（外国語が堪能でないため）しゃべれない場合がある。英語ではっきり自らの意見を表明する中国の外交官などと比べると、明らかに後れをとっているというのです。しゃべらないのではなく、しゃべれないがゆえに不利益をこうむるといふ話は、外交だけでなく、ビジネスの世界にもあてはまることだろう。現代の教養には、発信力も必要。この点はビジネスと教養の接点を考えるにあたって、見落とすことのできないポイントではないだろうか。